

異世界転生天然物語

リオネ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふわふわした空間にいたら神様が現れて、危険を感じた。その後転生させられたけど
ね

目 次

ぶろーろぐ 転生

第一歩目 家族

第二歩目 新しい人×初戦闘

14 8 1

ぶろーろぐ 転生

「ふ～わふ～わふ～わここは、何処なんだろ～？」

真っ白い空間の中一人の少年?は誰かに質問する。誰もいないのに質問する。

「だ～れもいない。なんでこんな所に僕は入るんだろ～?」

また質問する。まるで誰かがいるかのように言葉を発する。

「ねえ～さつきから視線が気になるよ～誰かいるなら出てきてえ～」

少年?はそう言葉にすると突然彼の目の前に知らない女性が現れた。その女性は、神々しく、この世の人で一番綺麗だろうと思うほど美しく、少年は、出会い頭に

「お姉さん綺麗だね」

ニコツ

ストレートに言う

「そ、そんな突然言うんじゃない!!それに、色々と聞きたいのではないのか?」

そんな言葉を聞き、少し考えてから

「……あ～そーだつた!!」

忘れていたようだつた。それから、少年は女性に質問した

「……」はどこ？アナタは誰？なんで僕此処にいるの？なんでさつき突然出てきたの？さつきの視線アナタのだよね？なんで？なんで？」

少年は、自分の持っていた疑問を全部質問した。

「～～～～～つ!! いつぺんに質問するなあ～～!!」

女性は、大声で叫んだ。それは盛大に叫んだ。しかし、少年は答えを待つていた。

を輝かせながら

「はあ、なんだ私がバカみたいじやん……」

女性は、そう呟く。そして質問の答えを言う

「最初の答えはね死んだ時に来る空間。でも普通なら此処に長く居続けられない。普通ならね。次の答えは、私は神なの。突然出てきた理由は……特にない。視線についても

とりあえず神様は質問の答えをすべて彼に言う。すると彼は

「名前はなんて言うの？僕の名前は……あれ？何だつけ？」

彼は、神様の名前を聞く。そして、自分の名前も言おうとするが思い出せない。

「私の名前は、イザナミだ。」

彼に神様は名乗る。彼は、自分の名前を思い出せずにいた。しかしイザナミはそんなことを気にせずに話を進める。

「お前は、世界から排除されたんだ」「排除？」そうだお前の魂の強さが大き過ぎて此処へ排除た。此処はなきつきも話した通り普通なら此処に居続けられないんだ。だがお前は、居続けられる。「なんで？」何故かつて、それはな「それは？」……お前が可愛いからだあ!!「……ふえ？」あくもその顔なんでつて言う顔ほんと愛くるしいな……ハアハア駄目だ自制出来ない」

神様は盛大に暴走してしまい狂っていた。しかし少年は……既に逃げていた

「逃げてきちゃつた……なんかいやな予感がしたからしかたないけど」

そう言うと少年は、寝転がる。結っていた髪を解く。彼の髪は大体腰より上の所まで降りた。しばらく寝転がるうちにイザナミがやってきた。

「やつた見つけた「うつ」ちよつと待つて待つて「いや」拒絶しないでえ」「いや」なんでえ「じ」さつきみたいにならないから「……わかった」やつた……ゴホン、それでは、本題に移りたいと思います「本題？」そう本題、あなたには、転生してもらい

ます。「転生?」輪廻転生といつても記憶を保持したままですけどね。「それってしないとダメ?」しないとダメです。けど、どーしてもしたくないなら私とずーっと過ごすことが出来ますよ。「転生する」……うわあ〜んどここまで私嫌われたの〜」イザナミは急に泣き出した。少年は流石に罪悪感を感じたので「(めん)めんないしやい……う〜〜噛んじやつた//」

「ハアハア、この男の娘は化け物か!?」
イザナミは鼻から愛が沢山溢れていた。

数分後

「それでは転生していただく前に特典を二つ付けさせていただきます。「特典?」要は能力みたいなものです。それでは、ルーレットで決めさせて貰いますね。」

ガラガラ

ピタリ

不自然にもすぐさま止まってしまった。しかし少年は、そんなことを気にせず

「どんなの〜?」

「一つ目は、ネコ化ですね」

ボタボタ

イザナミは鼻を抑えてそういう

「続きましてはあ～」

ガラガラ

ピタ

今回のはちゃんと止まつた

「え～っと……えつ 「なに～？」凄い目？ なんだこりや？ もう一回回し直しますね「別にそれでいいよ～」 いいんですか？ こんなわからないので？」

「いいよ～ 大体分かつてるし」 ニコツ

ブシャー

イザナミの鼻から大量の愛が溢れた。

「アナタは私を大量出血で殺したいのですか？ 「??」 もういいです。 それでは転生していただきます」

イザナミがそう言うとベッドが現れた。

「そのベッドで寝れば次に起きたら転生完了って感じです」

そう言わると少年はベッドに潜り込み寝てしまつた。

6 ぶろーろぐ 転生

後日談

「寝ましたね」

パシャパシャ

「ハアハア……男の娘の寝顔……」

ボタボタ

また愛が溢れていた

「男の娘の寝顔は化け物か!?」

第一歩目 家族

「こんにちは～……あれ？ こんばんはかな？ どっちでもいいや僕はイザナミ様から転生させてもらつた『イリーシュ・バンヘルン』です。名前？ 名前は転生してから新しい家族につけてもらいました。お父さんの名前が『ロロ・バンヘルン』お母さんが『ナナ・バンヘルン』お姉ちゃんが『アスナ・バンヘルン』僕の新しい家族です。

「おーい、イリーチー朝ご飯だぞ～」

「はーい、今いきますお父さん～」

イリーチーって僕の愛称です。なんか女の子っぽいんだけど結構気に入ってるんです。
あっ!! 早く行かないと

「おはよ～イリーチー相変わらず可愛い抱き締めさせてくれ～」

「うつお姉ちゃん苦しいよ～」

お姉ちゃんはよく僕に抱き付いてきます。お胸が当たつてとっても苦しいんですけどね。あつちなみに僕は今年で7才になります。お姉ちゃんは、僕より10才年上です。

「こらこら、アスナ、イリーシュが困つてますよ」

「離れるのはいやだ、イリーフを摂取しないと私やつていけない」

「今のはお母さんです。お母さんもよく抱き付いてきますがお姉ちゃんほど苦しくしないのでいいです。」

「お前達、朝ご飯を食べるぞ。そろそろ、イリーを離してやりなさい。」「はい」

ふうやつと解放された。それよりご飯ご飯今日の朝ご飯

「それじやあ、手を合わせて」

お父さんがいただきますの挨拶をするので僕も手を合わせる

「「「「いただきます」」」

皆でいただきますをした後は、ご飯を食べる

「もきゅもきゅ」

ふわあ～やつぱり美味しいな、玉子焼き

「イリーは可愛いな」

「全くですねイリーシュは可愛いですね」

「我が息子ながら……いや娘なのか？」

むつお父さん僕は歴とした男の子ですよ。そんな事よりも

「そーいえばメイドさんたちは?」

「んつ、あゝ今日は皆休みだよ」

お父さんが答える。僕の家バンヘルン家は結構な貴族っぽい家らしい。お父さんもかなり有名人らしいけどよく知らない。お母さんは、メイドさんたちと話してるところを見る。お姉ちゃんは、有名な魔法学校に通ってるらしい。あゝそりゃあこの世界のことについて話してなかつたこの世界『エディア』は魔法の世界、小学校から魔法を習い始め、中、高つて続く大学は無い。僕ももう少しで小学校に入るから魔法の基礎をお姉ちゃんに教えてもらつてるんだ。魔法にも五大元素があつて、炎、水、雷、鋼……ん? 一つ足りないって最後の一つはね始まりの魔法『 α 』っていう魔法なんだけど未だに解明されてないんだつて、昔の偉人の殆どがこの α の魔法を使ってたらしいけど……」「イリー考え方か?」

「お姉ちゃん苦しいよ」

お姉ちゃんが後ろから抱き付いて……むくむく

「あゝイリーが可愛い過ぎるのが悪いんだぞ」

ふにや?!

「お姉ちゃん……ど、どこ触つてんの//」

「どこつて、それはイリーの可愛いところだよ」

ふにやく力が抜けていくそんな所触つちや

「いやあゝ!! やあゝ!!」

「嫌がるイリーも可愛いなー

そんなに、そんなに尻尾触っちゃ

「ダメえ〜〜
!!!」

「つ!! キヤツ!!」

フツフツ!!

僕ら、いや僕だけがこの家族の中で唯一獣化出来る魔法を使えるんです。獣化でいつもネコ化だけですがね……それを知ったお姉ちゃんやお母さん、メイドさんたちでも僕をいじり等散らすようになつてしまつた。だから僕はなるへをくネコ化しないようにしてたんだけど……

「いつてて……」

ブハア

えつ……お姉ちゃんが吐血した……

「わ、我が人生に……いつぺんも……悔い……な……し」

「お姉ちゃん死んじやだめだよ……ぐすつおねいぢやんじんじやいだ～
ぐすつんぐすつんなんでなの～」
ガハツ

「イリーの…泣き顔……これはマジで……私のライフが…0だわ…」

後日談1

「あの二人なにをやつて いるんだか……」

「あらあら、アスナがほんとに死にそうですわよ？」

「アスナならイリーガいる限り死なんだろ」

後日談2 イザナミ

「あの男の娘、凄いよ!!」

「エタに走つて愛を溢れさせていた。

第二歩目 新しい人×初戦闘

イリーシュ・バンヘルンです。今日は、メイドさんたちに新しく入って来る人を紹介するつて言われたから早起きしてしまいました。現在の時刻は朝5時……はっ!! 早過ぎた……ううしようがないもん昨日早く寝ちゃったからしようがないもん……眠くないしお散歩にでも行こ

「うーん……イリー・私の弟」

ビクツ

お姉ちゃん……またベッドに潜り込んでたの……うー／＼お姉ちゃんの寝顔は綺麗なのに、なんであんな性格になるの?……あつそれよりもそーっとそーっとお姉ちゃんを起こさないように

「すくすく」

ふうなんとか抜け出した。お散歩は……お庭に行こ

トコトコ トコトコ トコトコ

「ふわあ～こんなに綺麗なんだ朝早くだと」

お庭のお花が夜の光の魔力でピカピカ～って光つてとっても綺麗なんだよっ！お昼のと違つて深い青や明るい黄色なんかに変わつてまるでおとぎの世界みたい

ガサガサ

「そこにあるのは誰だ!!」

「ひやつ!!」

声にビックリすると僕の目の前に1人の男の子？がいた。とても細くて綺麗な顔、肌をしていたので女の子っぽいんだけど男の子っぽいそんな感じがする。

「ねえ、君男の子？女の子？」

僕の質問を聞いてその子は

「それよりも貴様は、誰だ!?」

む～答えてくれない僕が名乗れば答えてくれるかな～？

「僕の名前は、イリーシュ・バンヘルンだよ」

ふふん、お名前言つたんだから答えてくれるよね

「嘘だな～：イリーシュ様は、今寝ておられるはずだ!!という事はお前は侵入者だな」
ふえ？なんでこんな事になるの

「嘘じやないもん正真正銘のイリーシュだもん!!」

「ふんつそんな見え透いた嘘引つかかるか」

ジャキン

えつ、両手に銃……

シュン!!

「次は、外さんぞ大人しく捕まるなら手荒なまねはしない」

ハハハ、どうやらあの銃は音がしないんだね。それに見た所あれは、『魔弾』だ。確かあれって相当な使い手しか使えないってお姉ちゃんが言つてた。僕と同じくらいで使えるなんて

「凄い!!」

「はあ?」

「凄いね君僕と同じくらいで魔弾が使えるなんて「なつ!見えてたのか!?」ん?うん見えてたよ僕の目はね凄い目なんだよ」

「有り得ない魔弾を初見わかるとは「性質は鋼と水を加えてたよね?」……そこまで凄いなこの子。お姉ちゃんが言つてたけど物質に性質、魔法の五大元素を混ぜ込む事が出来るんだって。後、人それぞれに得意な魔法元素があるらしいけど普通は1つなんだよねでもあの子は、2つとも同じくらいの強さだつたな……あはは、この世界に来て初めて戦うな元の世界だと色々大変だつたからなあ、そんじややりましょ

か。

ピッ

「それじやあ始めようか……」

「（つ！！）雰囲気が変わった！！」

「来ないならこちらから行くぞ！！」

俺はそう言い腕を振るそして炎が腕を取り巻きそして、手に剣が形成される。

「プロミネンス」

「（あれはまずい） はあああ」

シユン シユン

「バーンスラッシュ」

魔弾が飛んで来るが俺にはスローで見える。その魔弾を俺は、切り裂く

魔弾は2つに切り裂かれ、蒸発する。

「なっ！」

相手との間を一瞬に詰め剣を向ける。

「くっ！」

銃を構えようとすると

「コレのことか」

既に俺は手の中にあつた

「俺の……僕の勝ちだよ」

僕は戦闘態勢を解く

「うう……ま、負けた負けてしまつたせつかくイリーシュ様のお側につけるのに負けてしまつた」

えつ、この子が新しく入つて来る人？

「ねえ君は「イリーデコ」お姉ちゃんつ!!」

「あ～イリーやつと見つけた～私の嫁さん」

「む～僕は男だつて、それに僕は「アスナ様？それにイリーツて、もしかして、本当にイリーシュ様だつたんですか」うん」

「すいませんでした!!イリーシュ様とは知らずに手を上げるようなことをしてしまい、死んで詫びます」

「ちよつと、待つて待つて誤解してたならしようがないよ「しかし」ん～それじや僕が罰を出すからそれでだめ？「分かりましたなんでも受けます」それじやあ僕と友達になつて「へ？」お名前も教えて「ええ？」む～教えてくれないの？」

僕は泣かないよ。どんなに辛くても泣かない

「泣かないもん……ぐすつ」

「わっわ、泣かないで下さい。言いますから私の名前はツグミです」
ふえへ

「いい名前だね」ニコツ

カアソツ

あれ？なんかお顔が真っ赤になつてゐるけどお熱でもあるのかな？

「ていつ！」

ピトツ

僕はツグミさんのおでこにおでこをくつつけると更に真っ赤になつた。なんでだろ？

「。。。つ！！し、失礼します」

そういうと、凄い速さでどこかに行つてしまつた。

「フフフ、イリーよ：よくも私を1人にしたな」

僕はとてもいやな予感がした

「そんなイリーには、お仕置きだ！」

だきつ ぎゅく ペロペロ

「ふえお姉ちゃんそんなに抱き締めないでえうきやつ、そこ舐めちやだめ！」

お姉ちゃんは、どんどんエスカレートしていき

「ハアハア、イリーは、やつぱり可愛いな～ペロリ「ひやつ!!」ん?」がいいのか「ニヤ
～だめ～」ネコミミが出てきたぞ「耳触っちゃだめ～」ハアハア、ベッドに行こう「う
～お姉ちゃんなんて大っ嫌い!!」……え?」

僕がそう言うとお姉ちゃんは、固まってしまったので僕は、その間に逃げてしまった。

「それでは、イリーシュ様新しく入ってきた新人です」

メイド長のマリさんが僕に向かってそう言うと……

「私は、ツグミと申します。先程は失礼をお掛けしました。」

そんなことをいうもんだから僕は

「ツグミさんだ～」

だきつ

思いつきり抱き付いてやつた。

「なつ／＼／イリーシュ様／＼＼」

ざわざわ　ざわざわ

メイドたちが騒ぎ始める。マリさんもボーゼンとしているので僕が
「マリさんツグミさんを僕の専属にしてください」

「……あつ、はい元からそのつもりで入れた訳ですから。」

ふえ？元からそのつもりで入れた？

「ええ、同じ年の異性と居るのがいいとおもつてね」

お母さんが答えてくれる。

「ハハハ、そういうことだぞイリー」

お父さんが高笑いしながらそういつたので僕は

「よろしくねツグミさん」ニコツ

笑顔でツグミさんにいう。こういう時は笑顔でいうのが一番なんだよね

「こ、こちらこそよろしくお願ひします。」

またお顔を真っ赤にしてる。恥ずかしがり屋さんのかな？

後日談

「そういえば、イリー」

「なに？お父さん？」

「アスナはどこにいるんだ？」

「アスナなら庭に居ましたけど何やらブツブツ言つてましたよ」

後日談2

「お、お姉ちゃんあのね……僕、お姉ちゃん好きだよ」

「イリーに嫌われ……イリー今のは本當『う、うん』私はイリーに嫌われてないんだ」

後日談3

「え、ツグミさんって女の子だつたの」

「私としては、イリーシュ様が男の子だとは思えません」

「ぶう、歴とした男だもん。それにイリーシュ様つて、嫌あ！」

「むづ確かに戦闘の時は凛々しかつたですが、後いやでもだめですイリーシュ様としか

私は呼べません

「いやあ、僕たち友達だよ？ 様付けで友達に呼ばれるなんて嫌あ～」
「いやしかし「う～」……はあ～わかりましたそれでは、イリーシュ……様「うつうつぐ
すん」わつわつ、泣かないでください「敬語無し、イリーって呼んで」……わつわかり
：わかつたせめて2人だけの時ね「名前呼んで？」イ、イリー……／＼＼＼